

KOMAZAWA 1 × 2 TOKYO GAKUAI

駒澤大学 1 × 2 東京学芸大学

東学大・山田(8)と競りながらもサイドを割ってクロスを送る塚本(左)。終盤の猛攻も実らず、手痛い黒星を喫した (撮影・野澤俊介)



待っていた落とし穴 逆襲喰らい痛恨の逆転負け

「これがサッカー」

「東学大はうちの敵にしているから、徹底してやらないと足を掬われる」。前節、日大戦終了後に語っていた牧野の不安が的中した試合になってしまった。

東学大は長身FW平井を起点に左から山田、右からは金澤が絡んでくる分厚い攻撃が特徴。これに対し駒大は平井に菊地をあてがい、右SHに初先発となる田谷を起用する布陣で臨んだ。27分の宮崎のビューティフルゴールで先制したのは駒大だったが、39分、マークの受け渡しのスレから金澤に同点弾を許してしまう。

後半、東学大が退場者を出すと、流れは一気に駒大に傾く。しかし引いて守る東学大に対し、相手陣内深くまで侵入してもシユートにまで至る場面は限られていた。そして85分、最悪の展開を迎えてしまう。CKからの逆襲。後半東学大に唯一許したシユートが、駒大ゴールに吸い込まれた。

結果的に数的有利になってからの時間帯での決定機の逸機が直接の敗因になってしまったが、長丁場のリーグ戦ではこのようなゲームもしばしば起こり得る。納得はいかないが、これがサッカー。ずっと勝ち続けるのはやはり難しい」とは秋田監督の弁だ。しかし、10人の相手の方が球際が強かったり、セカンドボールを拾ったたり、気持ちが強かった(田谷)のもまた事実だ。最後まで死ぬ気でボールを追いかけて、同じ過ちを繰り返さないようにしたい(新川)。勝者になるためのメンタリティを再認識し、上を目指すために邁進してほしいものだ。

(遠藤 雅之)